OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | ジュエリーデザインの現場 |
| Author(s) | 内海, 和子 |
| Citation | デザイン理論. 1992, 31, p. 68-69 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/52781 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# ジュエリーデザインの現場

内海和子

TASAKIのデザインは大きく分けて，量産デザイン，一品デザイン，デザイナーズコレクションの3つに分かれます。

量産デザインは1つのデザインで20～30点制作します。工業デザインと比べ非常に数が少ないので多品種少量生産の典型といえますが，年間の開発数は2000点を軽く越えます。一品デザインは素材が一点しかないもので1つ1つデザインを丹念に行います。

デザイナーズコレクションはデザイナーの個性を充分に発揮できる分野で，デザイナーのオリジナリティーを追求して行くものです。この作品にはデザイナー名が刻印されます。今回はデザイナーであり，作家であることも求められる，コレクションを持つデザイナーのものづくりの背景について，考察しました。

デザインを展開して行く場合，何をコンセプトにするか，何をテイストに持ってくるかはデザイナーの基本になる問題です。

デザイナーにとって自分のスタイル，パターンを作り出すことは大切なことです。その為には相反する要素，異なる要素をできるだけ切り捨て，必要なものだけを抽出し形にしてゆくことが必要になります。

私は自分のポジションを探るために，対比を一つの考察の手掛かりとし，

| | |
|---|---|
| デコラティブか | シンプルか |
| 曲線的か | 直線的か |
| 動か | 静か |

という具合に比較しながら，物づくりの中で試行錯誤を繰り返してきました。

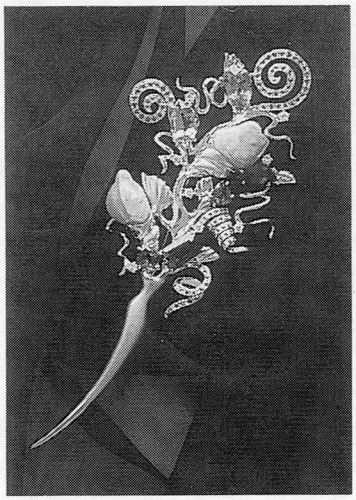
又，装飾的なもの，非装飾的なものを西洋と日本とに分けて，扱い方の違いをずっと見つづけてきました。が，私の作品のベースになる，そのどちらか1つを選択できずに今まで考え続けてきたように思います。

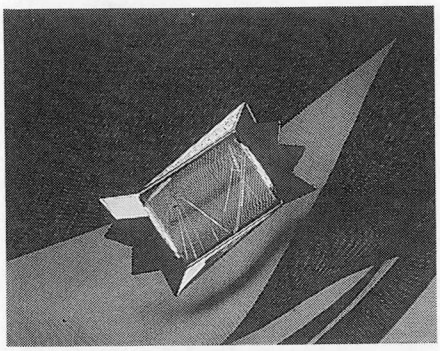
## 装飾について

現代様式は一世紀あまりに渡って，装飾を悪として排除してきました。私は時代の要求や現代の性格にふさわしいものを作る時，より装飾的雰囲気を持たせることは時代に逆行するというような意識があり，装飾は悪趣味というような考え方に従っていたように思います。しかし装飾とは不思議に人を引き付けるものがあります。私は学生の頃，19世紀末芸術に触れ，アールヌーボーに心酔し，ガウディ，エミール・ガレ，クリムト，ビアズレーに夢中になりました。その時にボードレールの「悪の華」という詩集を知りました。

「悪の華」という題名はイマジネーションをかき立てる響きを持っており，深く脳裏にやきつけられました。この言葉を発すると浮かんでくる形が妙に装飾性を帯びてくるのです。その感覚は非日常的となり甘美な夢の世界へと引き込まれ，そして色彩が浮かびあがってくるような感覚を味わうのです。装飾を施すということは，官能的な情緒を喚起する何かがあるのかもしれま

せん。私は装飾を排したモダンスタイルを追いながらも一方で，宝石というマテリアルをふんだんに使用した装飾性の強い作品を作ってみたいと思うようになってきました。





非装飾的なもの

日本の伝統文化を考察してゆくと，白木信仰とか，日本建築，日本庭園，茶道，書道など素材を大切にする精神風土が根底に流れており，そこに美を見出す考え方があります。

舞踊に例えると素踊りに当たるもので，化粧や衣装などの装飾性を一切省き，舞そのものに焦点を合わせるという見方はテンションの高さを演ずる側も，見る側も要求されます。

日本の精神性は，目に滲みるような真白な滝が垂直に流れ落ちる姿そのもので，簡潔な美を求めることに，精神のすがすがしさを感じるようです。

私はシンプルなデザインを行うとき，静けさを感じさせることを主題とし，心も作品もできるだけストイックでありたいと思います。

西洋の文化は余白を埋めてゆく，ものを加えて行く文化であり，日本の文化は余白，間を大切にし，ものを省いて行く文化であると云われています。

目に見える豊かさ，目に見えないが豊かであると言う事の文化，美意識の違いは各々興味深い示唆に富んでいます。

私にとって，このどちらの文化も捨てがたく，どちらの美意識も大変な魅力となって迫ってきます。

宝石はもともと日本に育たなかった文化です。それを日本の文化をふまえながら解釈して行くのには単なるスタイリングだけでは解決できないものがあるように思います。

私は装飾的，非装飾的の相対立する二つの両極を追いながら，時に華麗さを求め，時に精神性を重んじながら宝石にふさわしいデザインを展開して行きたいと思います。

うつみ・かずこ　田崎真珠　デザイン室課長
1992. 5. 23　第131回研究例会